

令和二年十月一日発行
通巻一五四号(毎月一日発行)

京鹿子

A vertical embroidery on a light-colored fabric. A blue stem runs diagonally from the bottom left towards the top right. It features several red flowers of different shapes and sizes, some with white centers. A large yellow tulip-like flower with a white center is prominent in the middle. There are also blue, stylized leaves and a blue five-petaled flower at the bottom. The title '京鹿子' is written in large, bold, black calligraphic characters across the top.

10月号

鈴鹿呂仁
拾掬集 その六十一



生身魂つむじまがりの泣き上戸
出額びたいに三本の皺生身魂
山門へ遠かなかなの写経寺
ひぐらしの啼く追懐の母のこゑ
秋に入る白いページに風のこゑ
自惚れの殿様ばった天を蹴る

修正の液に絡みつく傷秋
母刀自へ窓越しの礼十日菊
重陽の日の出の天の神がかかる
十六日終ひの炎に父の秋

嵯峨野早暁吟行

空耳の滝音の絶ゆ嵯峨晩夏
朝鈴の寄り添ふ小径嵯峨あるき
竹林は秋一景を結びをり
別れ蚊を打たず祇王に胸豊む

近詠

和田 照海



ヒロシマの蝉

ヒロシマの蝉は鳴かずに祈りとす
鶴の島海より低き石切場
正論として取り敢へず水盗む
一の築二の築太郎次郎老ゆ
大雪溪抜け雲表の白馬岳

近詠

松本 鷹根

稲の花

木の橋の袂灯して月見草
粒状の離花踏む角の百日紅
白日傘沖に遠のく帆影あり
稲の花遺言いまに還す晴れ
雨あがりどつと陽の射す蝉の声

—近詠—

塩貝 朱千



はたた神

舞ひ揺るるだらりの帯の青楓

祇園恋しや舞ふ妓のうなじ涼やかに

はぐれ鵝を聲で脅してはたた神

ニュートンの木に青りんご鴉の不思議

写経机に映ゆ青楓筆をとる

英華採集

黙秘権使ひ果して青簾

高 槻 杉 井 真由美

刑事事件、刑事裁判等では事前に黙秘権を行使出来る旨が告げられるが、掲句の場合は夫婦間での他愛のない喧嘩の一齣でありその権利は無いに等しい。「知らぬ存ぜぬ」を通したのはどちらであろうか？と言うのは問題ではなく法律で保障されている黙秘権が通用しない前提が面白いのである。黙秘権を使い果してしまつて自白をした結果を省略して「青簾」の季語に託した効果が出ている。

雷きざす本音は別紙といふ怖さ

東 京 犬 飼 典 子

本音とも冗談とも取れる事が廻りには多くあるのを誰もが知るところであり殆どがお茶を濁して終わらせてしまうが、人間関係をギクシャクさせるのは誤解である。掲句は、何人かで話し合っていた他愛のない事に関して別れた後にかかつてきた電話と思えば納得がいく。あの時のあの件について自分の本音を改めて聞かされ、人の怖さを知ったのであろう。「別紙といふ」の表現に妙がある。

風の輪のオブジェをくぐる秋の蝶

福 知 山 吉 岡 知 香

夏の蝶は、自由奔放に好きな場所へと飛び廻っているが秋蝶ともなれば、その元気さも失せて一日一日の飛翔を楽しみながら余生を生きようとしているのではないだろうか？掲句の「風の輪のオブジェ」は、正しく秋蝶が描いている理想の楽園である。風の輪で出来るオブジェを色々イメージしながら句を鑑賞するのは実に楽しい。俳句は、季語に託して読み手に鑑賞を委ねるのが一番である。

荒ぶ猪 沼田巴字

深秋の夫婦の心とのはず
どぶろくや戦後を語る一駒に
猪狩にはや犬吠える吉野道
隠国の神の意ならむ荒ぶ猪
後水尾の隠れ里なり柚子は黄に

虫の音 植村蘇星

明日がある今日の一灯夜の秋
ホ句ありてこそその生活や十三夜
虫の音や玄閑静々いとまこふ
詩ごころ絵心十色虫の秋
すべからく相応に生き秋惜む

日傘 丸井巴水

水中の鯉も汗かくランチ時
ぶかぶかとオルガン明日は夏休み
裏声で返す鸚鵡や青すだれ
乾ききる亀の甲羅へ日傘陰
盂蘭盆会錆びぬ地獄の釜休め

汗拭いて 北川孝子

汗拭いてひと日づつ老ゆまぶしさよ
黙考の午後なり遠山したたれり
梅雨月夜手つなぐ友も今はなし
張りつめて生きて来し道山したたる
俳句にも二刀流欲し汗みどろ

軋み 直江裕子

炎天に縄がいつぽん垂れてゐる
籐椅子の軋み風より軽き老い
紫陽花の茂みの奥に泪壺
梅雨さなか畳の残る部屋ひとつ
炎天や長いタイトル流行る本

花合歓 伊藤希眸

自肅令梅雨に流して晩年や
大夕焼テノール漠と吹き流れ
汗の髭面しほれ加減を玻璃映し
走り疲れの御神輿の息夕きざす
合歓咲きぬ雨にも笑みぬ友と逢ふ

蓮の花 高木晶子

泰山木の花見る背丈縮まりぬ
名優の隠れ家にして路次涼し
残像の上に残像半夏生
蓮の花肩に重さのある内は
梔子を愛でし人あり雨の音

ひとり啼き 奥田筆子

ぎっくり腰ばかりの胡瓜一袋
賀茂茄子や乳房を交叉おんぶ紐
白粉花女の文化つまはじき
梅雨蟬の空気の重きひとり啼き
身のうちのすすろになりて花梔子

神麓集

ジャムセッション 井上菜摘子

片減りの靴花野よりはきかへる
黄葉明りはたらく街の端あるく
枝豆やもちろんと言ひでもと言ふ
ペガサスから螺旋階段おりてくる
銀漢の尾にふれ君とジャムセッション

星 月 夜 村田あを衣

星合ひの波に乗りつぐ笹の舟
銀河あふれ我が掌中に星の砂
星流る絵踏の島は孤舟めく
琴座より透きゆく音色秋深む
ふる里は円のまん中星月夜



通巻一千号の表紙



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

空蟬の濡れある木曾路夜明け前

京田辺 山中志津子

とある日は鉄砲百合を標的に

青鷲の加速車線へ入ります
なめくちりあとをつければ偉人像

城陽 鷺山 珀眉

有り無しの彼岸へ渡る螢川

黒南風やハンゲル文字の港町

夏椿まつさらな闇揚げをり

絢ひまぜの香と余音青すだれ

枇杷熟れて鳥語人語を集めをり

半夏雨たんすにねむるパスポート

梅雨ざんざ角のパン屋に傘の列

声を出さねば八月の海は哭く

福山 亀井 福恵

父の日の父の背中を誇りとす

しのぶ吊り遺されしこと諾へり

少年の長き暁や夜の秋

水は水に流れて大河半夏生

反り合はぬ一事が万事ラムネ噴く

とうすみに紙のにほひのほのとあり

盛り上がるネット配信サザンの夏

夏椿質実といふ坊暮し

空蟬やラブは夢みる一頁

福知山 西村 白籽

雨しとど青田を巡るすずめどち

花合歓や淋しい時は風になる

螢火や草書でもらふラブレター

ストローを走るよ走るソーダ水

青簾風青ければ風に透く

京都 菊池 和子

水に映ゆ望郷の光ゲ初とんぼ

螢火の沢にこもれる小宇宙

終章へ青葉若葉の主旋律

塩といふ魔法のタクト豆ごはん

自分史のおもき手のひら夜の新樹

高槻 安田 優歌

躓きて前途へ日傘傾ける

大夏野両の手ひろげ風となる

万緑の底の小流れ透く日輪

蝉の木の揺れむばかりに大社

アマリリス夜景ばかりの写真集

大阪 本郷 公子

万緑や魁夷の白馬天翔る

鈴蘭やピアノの上のちひろの絵

月見草夢の継ぎ目の真白なる

黄身の濃きオムレッツふたつ若葉光



黙秘権使ひ果して青簾

高槻 杉井真由美

黒南風や百鬼夜行の出番待ち

前世では平家の姫か螢飛ぶ

枇杷をむく無骨な指の人生観

雷きざす本音は別紙といふ怖さ

ほつとして脱ぐ夏帽子再会す

まくなぎや説明不足と思ひつつ

短夜の浅き眠りにある疲れ

風の輪のオブジェをぐるぐるの蝶

福知山 吉岡 知香

城下の寺ちちる語りの高麗門

鈴虫と静かに法話京の風

村一の長寿の孤独生身魂

七夕や会へない日々恋育つ

アリンナ 伊吹 之博

納豆入りの今朝のオムレッツ夏若し

父といたあの夏休みコマ送り

子は居間でドリル繰る蟻の列